

4日の両日にかけて神戸商科大学において開催された。大会は「人口・産業の地域変化」、「中国の地域と経済」など11のセッションに分かれて活発な議論が行われた。人口に関連した研究として、戴二虎「中国における三大都市圏の人口流入の地域パターンとその規定要因」では、中国の最も重要な三大都市圏（北京、上海、広東）への人口流入パターンを明らかにした上で、その規定要因について、重力モデルを用いた分析の結果が発表された。長尾謙吉「製造業雇用の地域的変化、1970-1990年」では、1970年から1990年にかけての都道府県別製造業の職業別就業者数の変化について、拡張シフトシェア分析を適用した研究結果が報告された。本研究所からは小島克久技官が参加し、「都道府県別世帯数の将来動向」について、推計方法を中心にした発表を行った。

(小島克久記)

## 第15回日本大学国際シンポジウム「国際労働移動における労働と生活」

標記(The 15th Nihon University International Symposium: Work and Family Life of International Migrant Workers)の国際会議が1994年12月5～7日にかけて東京市ヶ谷の日本大学会館で開催された。主催は日本大学総合研究所(組織者:永山利和商学部教授)で、後援が国連人口基金、国際移住機関、米国・東西センター人口プログラム、韓国保健社会研究院であった。この国際会議は日本大学総長指定の総合研究「21世紀人類の豊かさの探求」のプロジェクトの一環として行われたものであるが、同大学の各学部の関係者だけでなく、内外からこの分野の第一線の研究者が多数参加した。

第1日目の午前には日本大学、国際移住機関、東西センター人口プログラム、韓国保健社会研究院の主催・後援機関代表のあいさつに続き、永山教授による「国際人口移動と家族」と題された基調報告が行われた。そして、午後にはトピックⅠ「国際人口移動に関する現在の理論的諸問題」の下にセッション1「国際人口移動のメカニズム」(司会者:Kenichi FURUYA, 報告者:Stephen CASTLES, Toshio KURODA)およびセッション2「人口移動の社会経済問題」(司会者:Manolo I. ABELLA, 報告者:Charles STAHL, Hideo KOBAYASHI), トピックⅡ「労働移動と国際的政策調整」の下にセッション3「国際移動労働者のフロー」(司会者:Philip L. MARTIN, 報告者:Shenjin WANG, Kenichi FURUYA, Reinhard LOHRMANN, Hiromasa MORI)が行われた。

第2日目の午前には引き続きトピックⅡの下にセッション4「国際労働移動と“情報ネットワーク”」(司会者:Won-Bae KIM, 報告者:Graziano BATTISTELLA, Makoto SATO, Philip MARTIN, Paul CHEUNG), 午後にはセッション5「人口移動政策の調整」(司会者:Stephen CASTLES, 報告者:Yoshio OKUNISHI, Won-Bae KIM, Yoshio MAYA, Nana OISHI, Madoka SAITO)が行われ、さらにトピックⅢ「移動労働者とその家族の生活状態」の下にセッション6「移動者の家庭生活」(司会者:Graeme HUGO, 報告者:Nasra SHAH, Emiko MIKI)が行われた。

第3日目には引き続きトピックⅢの下に午前セッション7「移動労働者の女性家族成員」(司会者:Shunichi INOUE, 報告者:Hania ZLOTNIK, Martha DUENAS-LOZA, Graeme HUGO, Guida MAN), 午後にはセッション8「人口移動の社会的、文化的問題」(司会者:Reinhard LOHRMANN, 報告者:Maruja ASIS, Anthony FIELDING)が行われた。最後に、トピックⅣ「要約および学術的行動プログラム」の下に、STAHL, ABELLA, ZLOTNIKの各氏により各トピックの「要約」、Lee-Jay CHO博士により「結論」、Andrew MASON博士により「学術的行動プログラム」が発表され、永山教授のあいさつで締めくくられた。この国際会議は日本大学人口研究所の元事務長で、現在は総合研究所の事務局長である河原崎福治氏にとって裏方を務める最後の会議であったことから、指名により同氏のあいさつも閉会に当たって行われ、満場の拍手と和やかな雰囲気の中で幕が閉じられた。

国際人口移動がテーマの一つになった国際人口開発会議が開かれ、国際家族年でもあった1994年の最後を飾るには実にふさわしいテーマの国際会議であった。日本で開かれる国際会議の例に漏れず、若干儀礼的な面もあったが、オブザーバーも含めてこの分野で著名な研究者が一堂に会して討論するのは珍しいことであり、組織委員会のご苦勞がうかがわれた。なお、参加者のPhilip L. MARTINカリフォルニア大学(デービス校)教授によ

れば、1995年に再び日本大学で同教授が組織する国際人口移動に関する国際会議が開かれるとのことなので、大いに期待している。  
(小島 宏)

### 国際人口学会・国際日本文化研究センター共催「過去のアジアにおける 中絶、嬰兒殺し、遺棄」に関するワークショップ

IUSSP/IRCJS Workshop on Abortion, Infanticide and Neglect in the Asian Past と題された国際会議が、1994年10月17日から22日にかけて京都市の国際日本文化研究センター（所長：梅原猛）で開かれた「日本研究・京都会議」（国際日本文化研究センター・国際交流基金共催）の一環として10月20～21日に開催された。全体会議の実行委員会には歴史人口学者である同センターの速水融教授が参加され、ワークショップの一部を成す各分科会の組織者としての重責を果たされたし、同センターの助教授の落合恵美子、助手の Pauline Kent 両氏をはじめとする職員の方々もさまざまな面で尽力された。ワークショップ全体については国際人口学会の歴史人口学研究委員会の活動の一環として行われていることもあり、同委員会の委員である斉藤修一橋大学教授が James LEE カリフォルニア工科大学教授等の協力を得ながら組織し、同委員会会長の David REHER マドリッド大学教授も参加した。また、このワークショップは国際日本文化研究センターの共同研究プロジェクト「近代化過程における人口と家族」（代表者：速水融教授）の一環としての位置づけももっていたため、同プロジェクトの参加者も出席し、全体会議の参加者と合わせて比較的多数の参加者がいるセッションもあった。

20日（木）の午後には第1セッション「概念——古い考えと新しい視角——」（司会者：Akira HAYAMI, 報告者：Tamara HAREVEN, Motoko OHTA and Mikako SAWAYAMA, HSIUNG Ping-chen, Francesca BRAY, 討論者：James LEE and Osamu SAITO）と第2セッション「中絶、嬰兒殺し、遺棄、死亡力の男女別パターン」（司会者：WANG Feng, 報告者：Akira HAYAMI, Mahendra PREMI, Arup MAHARATNA, WANG Feng, James LEE and Cameron CAMPBELL, 討論者：William MASON and David REHER）が行われた。引き続き、21日（金）の午前には第3セッション「中絶、嬰兒殺し、遺棄、出生力調節」（司会者：Mahendra PREMI, 報告者：Laura CORNELL, Ken'ichi TOMOBE, Sebastian IRUDAYA RAJAN, U. S. MISHRA and K. S. JAMES, James LEE and Cameron CAMPBELL, 討論者：Francesca BRAY and Minja CHOE）、午後には第4セッション「現代世界における中絶、嬰兒殺し、遺棄」（司会者：Tamara HAREVEN, 報告者：Minoru MURAMATSU, WANG Feng, William MASON, William LAVELY, Hiromi ONO and Baochang GU, Minja Kim CHOE and Seung-Hyun HAN, 討論者：Sebastain IRUDAYA RAJAN and Emiko OCHIAI）と第5セッション「ラウンドテーブル討論」（司会者：David REHER, 報告者：James LEE and Osamu SAITO）が行われた。

アジア出身ないしアジアを専門とする歴史人口学者、人口学者、歴史学者、社会学者、人類学者等による活発な議論が繰り広げられ、非常に有意義な会議であった。また、問題が問題だけに人口学者だけでなく、フェミニストと思われる全体会議の参加者からの発言もあり、興味深い討論が行われた。なお、このワークショップの成果の一部は国際人口学会がオックスフォード大学出版会から出している人口研究書シリーズの一冊として出版されることになっている。また、このワークショップは1996年1月に台北の中央研究院（Academia Sinica）で国際人口学会が開催する予定の「アジアの人口史」に関する国際会議の準備会議的な性格も帯びていた。

(小島 宏)

### 厚生科学研究家庭・出生問題総合調査研究報告シンポジウム

平成6年12月19日（月）、日本総合愛育研究所の主催で、「平成5年度厚生科学研究：家庭・出生問題総合調査研究報告シンポジウム」が開催された。このシンポジウムは、近年の出生率低下を背景として、厚生省が平成3年度から厚生科学研究として実施している「家庭・出生問題総合調査研究推進事業」の第3年度の研究成果の報